

豊明希望チャペル礼拝

2026/2/1

「神のことばはますます盛んに」

使徒 12 : 20～24 (25)

今週火曜日から、イタリアのミラノで冬のオリンピックが開催されます。

今日の箇所ですが、ペテロの時代のヘロデが、前回、ペテロを処刑しようとした、あのヘロデが「定められた日に・・・王服をまとして王座についた」(12:21)その日は、スポーツの競技大会の日であったとも言われています。その理由の一つは、番兵を処刑した後、カイザリヤに下っていき、そこに滞在したと、前回、書かれて



いることからです(12:19)。カイザリヤはヘロデがローマの気を引くためにつくったスポーツや演劇などを行う、イタリアのローマに似せた競技場がありました。そこでの、おそらくスポーツ大会に行ったというわけです(←今も残るカイザリヤの円形劇場／競技場)。オリンピアド、オリンピック大会の競技のいくつかが行われていたまさにその時だったと言われることもあります。

ちょうど、たくさん人が集まりますので、自分の威厳を高めるために絶好の機会と考えたようです。早速、その箇所をまず読みますが、その時は、ちょうど、政治的にも、自分に好意的でないか、彼にとって気に入らない地域の人達にもおどしをかけて、俺は王様だぞ！俺を敬わなかったらと、威厳を振りまくには、ちょうどよいタイミングだったようです。その箇所をあらためて読みます。

「12:20 さて、ヘロデはツロとシドンの人々に対してひどく腹を立てていた。そこで、その人々はそろって王を訪ね、王の侍従ブラストに取り入って和解を願い出た。彼らの地方は王の国から食糧を得ていたからである。12:21 定められた日に、ヘロデは王服をまとして王座に着き、彼らに向かって演説をした。」

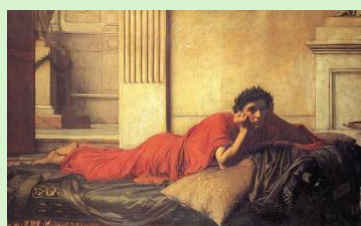


「王の侍従」というのは、王の身の回りのことを、寝所にも出入りし、そうして、いつも近くにいて、王に仕えた人です。ツロとシドンは、イスラエルの北に位置しますが、カイザリヤの北で、カイザリヤと同じく、地中海に面した貿易の町で、戦国時代の大阪の堺商人ではありませんが、為政者を軽く見て、従わないこともありました。詳しくは書かれていませんが、自分の言うことを素直にきかない、御しがたい人達を為政者は好みませ

ん。いつの時代の同じですが、色んな意味で潰してしまいたいと考えていました。これもいつの時代も同じですが、王の侍従にすり寄って、おそらく贈り物を携えて、あるいは、そうだ、ちょうどオリンピックが近いですから、王様に、金メダルか、勲章をさしあげましょう！的なことを言ったのかも知れませんが。「食糧を得ていた」とありますように、ガリラヤ地方などから、穀物や野菜や何かの交易で、弱みも持っていたからでしょう。石油を止めるぞ！ではありませんが、小麦も大麦もストップするぞ！と言われたら困りますから・・・ということだったのでしょう。

ルカはこの事を描くことで、ヘロデが、前回、ユダヤ人の評判を得るために、ペテロを殺そうとした動機と同じものであったことを示唆しているようです。

王様になって、すべての権力を手にしたけれど、権力が欲しい、誉められたい、褒め讃えられたいと考えた、そうです、いつの時代にもある為政者のようにです。



このヘロデのほぼ同時代、ローマ皇帝ネロがあらわれ（37～69：在位 54～68）、キリスト教への大迫害(64年)が行われますが、彼もまた、この競技大会で目立ちたいと、誉められたいと、ギリシャのオリンピックに参加して、67年のオリンピックでは、1808個のメダルをとったと言われています(ネロの死後、すべて取り消された・・・)。戦車競走で、戦車から落ちて金メダル、詩を詠(よ)んで金メダル・・・という調子です。

今日の、ヘロデの振る舞いを見て下さい。

「12:21 定められた日に、ヘロデは王服をまとして王座に着き、彼らに向かって演説をした。12:22 集まった会衆は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。」

まさに、当時の為政者のそれであります。権威が欲しい、あなたは国一番と、そのように人に誉められたい。「神の声だ。人間の声ではない」人々は彼の期待に応えてそう言ったと正確に記します。また、ルカは、これから彼に起きる神のさばきのことを念頭に入れています。

彼は人に裁かれなくても神に裁かれるということです。そうになりました。

「12:23 すると、即座に主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫に食われて、息絶えた。」



70年に、イスラエルの兵士であり歴史家であって、ローマと戦ったヨセフスというユダヤ人は、後に、ローマ側について、ローマに雇われて、二度とユダヤ人がローマに反抗しないための歴史を書きますが、そんな時代に、ルカは、為政者であっても、神に逆らったら、自分を神以上にしたら、必ず神から裁きを受けると、その報告を、包み隠さず、誰にも雇われることなく神にだけ雇われた弟子として、勇気をもって、書いたのです。多くを語りませんが、神こそが、歴史を支配し、国の上の上に立つ、真の権威者である事を、いわば、

彼は、ここで、ペテロの解放の続きとして、主張し、報告しているのです。

このルカの報告を、このヨセフスの報告と比較されることがあります。

ヨセフスも、このヘロデの死について書いています。ヨセフスは言います。ルカの言う「定められた日」「(ヘロデは、)ローマの皇帝のそれを似せた、銀で織った王服が、朝陽（あさひ）に照らされて神々しく光っていた」と言います。

ヨセフスも、なぜかヘロデが、その直後に死んだことを記していますが、それは、5日後で、苦しんで、死んだと。ルカの調べでは、いや、彼が神だ、人だと言



われた、その瞬間、「即座」に死んだと、あるいは修正しています。そして、それは、単に神様は凄いと、か、そういう意図ではなくて、きわめて事実即して、人間を見る医者目で見ているので、必ずしも神に打たれたとは言わず、その原因が、虫、当時は、回虫なども虫として指したそうですが、ヨセフスよりも、事実即して、科学的に書こうとしているといわれるのです。

しかし、それがいかに科学的で、原因結果が説明できる、奇跡とは関係なさそうな合理的な出来事であったとしても、その背後には、神がおられる、神が見ておられる、神の裁きと、恵みを逃れることは出来ないことを、彼は、科学者として、科学者だからこそ、神を恐れよと、御言葉が真実であると言っていることは、注目に値することです。

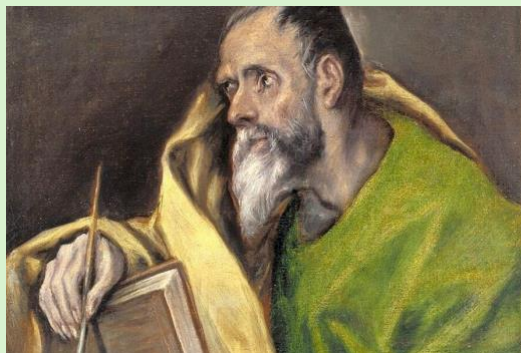
強調して言えば、虫が気味悪く、お腹の中で這い回る、そんな極めて、医学的な、また科学的に出来事の背後にも神がおられるということです。このいわゆる「虫」の背後に、あるいは、もっと言って、虫をも神さまは用いられるのかという間に、宗教改革者カルヴァンは、この虫も神さまの使いですか？と問われて、さすがに虫の背後には神はいないだろう・・・いるかな？と迷ったと言います。それで、カルヴァンは、これは、虫ではない、神はサタンを用いることがあるとも書いてあるから、サタンとも言えるが、おそらく、この虫は、天使の事だろうと結論しましたが、ルカは、ギリシャ語をどう読んでも、虫と言っているのです。おそらく、サナダムシか何かをさしているのだろうと。しかし、そんなきわめて、物質的なと言いましょうか、虫も虫、害虫のような虫さえも神の支配の中にある、すべての自然も、そして、歴史も、権威も、その上に神はある、神は、すべてのことを用いて、主権を持って、また、御言葉をもって導くのだと、ルカの報告は、背後に神ありとの真実をこそ述べているのです。

そして、ルカによれば、この、一連のペテロに起きた、12:1 以下の出来事のいわば、結論がこう言う事だと言うことです。すなわち、この事です。

「12:24 神のことばはますます盛んになり、広まっていっていった。」

神が聖霊降臨から始めた、神のことばの広がり、神の言葉は盛んになり、すべての人間の権威は失われてもということでもあります。

このペテロ対、ヘロデの戦いは、ペテロの勝利であり、神の勝利なのだと。そ



の戦いは、このように決着したのだと。ルカは、この記事を書きながら叫んでいるのだと思います。あるいは、祈っているのだと思います。また、クリスチャンに、教会に問うているのだと思います。

勝利者は誰か、神か人か。人は神に決して勝てないのだ。御言葉の力を削ぐことは不可能なのだと。

ルカはペテロの言葉を福音書にしたと言われることもあります(ペテロの福音書を記したという伝承・・)、ルカの福音書と使徒の働き、同時代(60年代前半)に書かれた、そのペテロの手紙には、このような御言葉があります。

I ペテロの手紙「1:24 **「人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。1:25 しかし、主のことばは永遠に立つ」**とあるからです。**これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられたことばです。」**

人とはローマであり、その栄えとは、ローマの栄えを指していると解釈されている箇所です。当時、ローマは散るとは、真正面から書けない時代に、このような詩のような言い方をしたと言われます。

すなわち、ペテロはこう言っていると。

人は草。ローマの栄は草の花。人はしおれ、ローマの栄華は散る。しかし、御言葉は勝つ。永遠に勝利する。主のことばとは、この福音書、そして、ルカ、ペテロ、パウロらに宣べ伝えさせた、神の言葉だと。神のことばだけが勝つと、そう言っているのです。

ルカも、このペテロの投獄から解放された出来事を記録して、ペテロは、その身をもって、神こそが勝利者であり、ヘロデにも負けない、ローマにも負けない。そのことが証明されたのだと、そう語っているのだと思います。

このルカの福音書が、人々に読まれた時代は、マタイや、マルコの福音書より後の時代であるとも思われています。ルカの、そしてI ペテロの、この紀元60年代の前半。ちょうどそれは、先に触れたネロの時代です。

教会は、そんな困難な時代、迫害の始まるその時代に、このような確信を与えられていたというのは、驚くべきことではないでしょうか。というより、クリスチャンとは、そういう確信と心がけを持つ人達なのだとすることを教えられているのではないのでしょうか。

ヘロデの死について見てきました。

「草はしおれ花は散る。しかし主の御言葉は永遠に立つ。」この預言は、ローマのことをペテロは言っていると言いました。

実際には、教会の苦難の時代は、このネロの時代から始まり、200年以上300年近く続きます。いったいいつ、この御言葉が実現するのだろうと人々は、思い続

けたでしょう。

最初に、今週火曜日から始まるミラノコルティナオリンピックの、そのミラノにおいて、紀元 313 年、ローマから勅令が出ます。いわゆるミラノ勅令です。

ローマの皇帝として、はじめてクリスチャンとなった、コンスタンティヌス帝によって、宗教の自由が宣言されたのです。実質、キリスト教の公認でした。その後、トルコで開かれた、はじめての世界のキリスト教会の会議、ニケア公会議(325 年)に世界中から 318 人の教会の代表者が集まりましたが、目の見えない人、手を失ったか、足を失った人だけを除く人が何人いたか数えたら 12 人以下しか数えられたなかったと言われます。12 人以外は、すべてローマの迫害と拷問によって傷ついた人達でした(Vance Havner:サザンバプテスト牧師)。

ルカは、はるかその前に示されていました。

オリンピックで競技をしている競技者ではない。朝陽に輝くヘロデでもない、ローマでもない。神が勝利者であって、教会である、いや、神の御言葉が勝利者であると。

「12:24 **神のことばはますます盛んになり、広まっていった。**」

このことは、ルカにとって、事実の報告であり、また、確信であったと思います。

今週の歩みが、あなたの信仰の生活から始まって、私の家庭も、私の会社や、この国、この世界も、この歴史を支配しておられるのは神様だと、その神様によって、私は愛され救われ、神様に彼らのために祈るようにと期待されていることを肝に銘じて歩む、この週の歩みとさせていただきたいと、心から願います。